



👁️👁️ みどころ

ポン・ジュノ監督と並ぶ韓国の巨匠パク・チャヌク監督は「復讐三部作」で有名だが、その一つで、2004年のカンヌと世界を震撼させた本作が、18年ぶりに4K版で復活！

ハリウッド版も面白いから、原作となった日本の漫画と合わせて、その“異同”を対比させればなお面白い。もっとも、そのためには、“催眠術”と“後催眠術（暗示）”の学習が不可欠だが・・・。

主人公たち全員の“人物像”はクッキリ・ハッキリしているが、ストーリーは複雑で闇に包まれているから、わかりづらい。なぜ監禁？なぜ解放？なぜ7.5階の部屋？なぜ7月5日までに謎解きを？その他、なぜ？なぜ？なぜ？のオンパレードだが、ネタバレ厳禁なので、あしからず・・・。

—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————

■□■あの名作が18年ぶりに4K リマスター版で復活！■□■

2004年の第57回カンヌ国際映画祭でグランプリを受賞。審査委員長のクエンティン・タランティーノ監督が激賞し、国内外の映画賞で高い評価を得た鬼才パク・チャヌクの傑作復讐サスペンス『オールド・ボーイ』が18年ぶりに4K リマスター版でスクリーンに蘇った。ポン・ジュノと並ぶ韓国の巨匠パク・チャヌク監督は、「復讐三部作」で有名だが、『親切なクムジャさん』（05年）（『シネマ9』222頁）、『復讐者に憐れみを』（02年）と並ぶそれが本作だ。

そのチラシには、「鬼才パク・チャヌク監督—世界を震撼させた驚愕の復讐サスペンスが4K化！！」と書かれ、「予測不可能」「打ちのめされること間違いなし」「世界水準の傑作」と絶賛する言葉が並んでいる。そこまで絶賛されているのは一体なぜ？

■□■03年版が名作ならハリウッド版も名作！評論も充実！■□■

私が本作をはじめて観たのは2004年11月21日。その時点では、同作はそのストーリーについて、「秘密を守れ！」が絶対条件。したがって、スタッフ契約書には、映画の結末を公開前に口外したら違約金を科すという条項があったらしい。そのため、同日付けで書いた同作の評論は、かなり気を遣ったものにならざるをえなかったが、それでも「すごいものを観た！」という実感のこもった充実した内容になっている(『シネマ6』52頁)。

さらに、同作を観て衝撃を受けたというスパイク・リー監督が、ハリウッド版『オールド・ボーイ』(決してリメイクではない)の監督を決意したことによって誕生したのが、2013年のアメリカ映画『オールド・ボーイ』。これも素晴らしい出来だったから、その評論も充実したものになっている(『シネマ33』151頁)。

そこで、本作を(再)評論するについては、「03年版」と「ハリウッド版」も読んでもらいたいことと、それとの重複を避けるために、両者も参考として掲げておく。

■前回 OK (?) のネタバレ 2人は高校時代の同窓生! ■

「ネタバレ厳禁」の中、2004年に書いた「03年版」の評論で、私は、「一つだけその大前提となっている事実を説明すれば、それはデスとウジンは先輩・後輩だったということ」と、ギリギリ OK (?) のネタバレ情報を書いた。また、そのうえで、「そこから解き明かされていく事実が、15年間の監禁と釈放後の追跡に見合う(?)だけの『あつと驚く物語』だというわけだ。乞うご期待!」と書いた(『シネマ6』55頁)。

私の高校時代は1965年から67年の3年間だが、デスが突然監禁されたのは1988年だから、デスの高校時代も私と同じような時期?それはともかく、私の高校時代は、舟木一夫の『高校三年生』の大ヒットを経て、昭和の学園ソング、青春ソングの全盛時代だった。もっとも、私は中高一貫教育の男子校だから、「ぼくら フォークダンスの手を取れば 甘く匂うよ 黒髪が」の経験はないが、本作に見る高校時代のデスは、ウジンの姉であるスアに対して淡い憧れの気持ちを・・・?

「韓国の鬼才、世界を震撼させた驚愕の復讐サスペンス」たる本作では、何よりも右手に握った金槌を振り下ろす「怪優」チェ・ミンシクの姿が印象的だが、本作後半には初心な高校時代のデスが登場し、さまざまな人間関係の解明(?)が進んでいくので、それに注目!

■今回 OK (?) のネタバレ (1) 催眠と後催眠現象 ■

催眠術とはどんなもの?その内容や怖さ、面白さを多くの人は知っているつもりだが、実はその科学的根拠についてはほとんど知らないはず。したがって、後催眠術(暗示)については、その言葉はもちろん、その内容も全くわからないはずだ。後催眠暗示とは「心理学や精神医学用語で、催眠中の被験者に対し、その催眠から覚醒したあとに一定の行動をとるようかけられる暗示のこと。通常、覚醒された後では『暗示されたこと自体をすっかり忘れるように』という健忘暗示と一緒に与えられる。これによって被験者は催眠中暗示された行動を、覚醒後に行うことになる。そのため、種々の心的疾患の療法に利用さ

れる」というものらしい。しかして、韓国の鬼才パク・チョヌク監督はそれを本作のテーマにしている(?)ので、本作の鑑賞についてはその勉強が不可欠だ。

本作冒頭では、とにかくよくしゃべる、いかにも「これぞ韓国男!」という感じのデスのアクの強さが目立つ。雨の中、公衆電話ボックスに入り娘に電話をしている姿は微笑ましいマイホームパンプだが、そこから、“あっと驚く展開”になっていくので、ビックリ!他方、15年後に突然解放されたデスは「日本料理店 地中海」へ一人で行くが、それは一体なぜ?それは後催眠によって、デスに対し、監禁部屋を出たら「地中海」へ行くように暗示がかけられていたためらしい。もちろん、今ドキのわかりやすい邦画のように、「何でも解説」してくれるわけではないから、スクリーンを見ていても、なぜそんな展開になっていくのかは容易にわからないが、それはしっかり勉強しなくちゃ!

また、カウンター席に座り、「生物をくれ」、と注文したデスが、出された生タコを手づかみで口の中に入れるシーンにもビックリだが、それ以上に、カウンター越しに若い女料理人のミドの顔を見るなり、デスが「久しぶり、違ったかな?」「見覚えがあるんだけど、どこで?」と質問したのは、一体なぜ?さらに、その夜のうちにミドがデスを自分の部屋に引っ張り込む(?)という、あれよあれよの展開になったのは、一体なぜ?なるほど、なるほど、これらはすべて後催眠暗示のなせる業・・・?

■今回OK(?)のネタバレ(2) 7.5階のヒミツ■

03年版の評論のラストで私は、「7月5日に秘められたヒミツとは?」の小見出しで、いくつかの疑問点をネタバレにならない限度の文章で書いた。それはその通りなので今回も維持するが、今回ネタバレOK(?)の情報として書けるのは、デスを監禁していた7.5階の部屋のボスで、高校時代のデスの後輩だった男イ・ウジン(ユ・ジテ)が“ある賭け”を提案するシークエンスの重要性。これは、15年間の監禁状態から突然解放されたデスが、日本料理店「地中海」で出会った若い女性ミドと一夜を共にするストーリーに絡むハイライトシーンだ。

本作全編を通じて、デスは“動の演技”が目立つのに対し、若いクセに不気味な雰囲気漂わせるウジンは“静の演技”がハマっている。そして、そもそもウジンがデスを15年間も監禁したのは何のため?また、解放された(した?)デスと対面したウジンが、デスに対して、「なぜ監禁されたのか?」を5日以内に解明する“謎解きゲーム”を提案し、同時に「謎が解ければ、ウジン自身の自殺装置を作動させ、解けなければデスとミドを殺す」という罰ゲームまで提案したのは、一体なぜ?

もちろん、その“答え”はここには書けないが、今回は許されるであろう(?)これだけのネタバレを書けば、7.5階の監禁部屋の意味や謎解きゲームの期限を7月5日としたことの意味がわかりやすくなるはずだ。03年版の評論も参考にしながら、18年ぶりの名作を再度じっくりと!

■□■今回OK(?)のネタバレ(3) デスとミドの関係は?■□■

本作では、デス役を演じたチェ・ミンシクの“動の演技”とウジンを演じたユ・ジテの“静の演技”が目立つが、助演陣としても、7.5階の管理人のパク役を演じるオ・ダルス、警護室長のハン役を演じるキム・ビョンオクとデスの幼馴染ジュファン役を演じるチ・デハンの熱演もすごい。人間に対する拷問は多種多様だが、ペンチで歯を抜き取られるのはどの程度の苦痛?考えただけでもそんな拷問は御免こうむりたいが、さて本作では?

他方、本作導入部でさっそうとした(?)女料理人姿で登場した後、なぜか奇妙なおじさんの一人に過ぎないデスといきなり一夜を共にするという、あっと驚く行動を見せるミド役のカン・ヘジョンの演技も興味深い。韓国映画特有の“美女”というわけではなく、個性的な顔立ちの彼女がパク・チャヌク監督演出の下で見せる演技は、後半からクライマックスにかけて“ハードさ”を増していくので、それにも注目!

ネタバレ厳禁の本作では、そのネタバレ情報についてあれこれ書けば立派な評論になるが、デスとミドの関係は一体ナニ?なぜこんな年の離れた男女が、ここまで本作のストーリーに絡んでくるの?そのネタバレはここでは書かないが、15年間という監禁期間の意味を含めて考えれば、なるほど、なるほど・・・?

本作後半では、ウジンの姉スアが屋上から飛び降りる自殺シーンが大きく注目される中で、デスとウジンとの“ドス黒い関係”と謎のゲームを仕掛けたことの意味が解き明かされてくる。したがって、後半からは、このスアにも注目だが、ストーリー全般を通じては、ミドの存在感とデスとミドの関係に興味と焦点を当て続けたい。

2022(令和4)年5月17日記

オールド・ボーイ

2004(平成16)年11月21日鑑賞(ナビオ TOHO プレックス)

★★★★★



第2章

怒り、悲しみ、そして…

監督＝パク・チャヌク/出演＝チェ・ミンシク/ユ・ジテ/カン・ヘジョン（東芝エンタテインメント配給/2003年韓国映画/120分）

……やっと観た。これはすごい！『キル・ビル～KILL BILL～Vol.1』（00年）、『キル・ビル～KILL BILL～Vol.2』（02年）のタランティーノ監督が審査委員長をつとめた2004年のカンヌ国際映画祭で審査員特別大賞を受賞したのも当然と納得。バルムドールの『華氏911』（04年）とは僅差だったとのこと。日本産のコミックを原形としているが、この映画は全く新しい独自のストーリーを創り上げているうえ、俳優陣の演技の迫力は満点。韓国パワー全開の快作で、これではとても普通の日本映画は太刀打ちできないと脱帽！

2004年カンヌ国際映画祭グランプリ受賞！

2004年5月の第57回カンヌ国際映画祭の審査委員長は、『キル・ビル～KILL BILL～Vol.1』（00年）、『キル・ビル～KILL BILL～Vol.2』（02年）のタランティーノ監督がつとめた。『キル・ビル』は言うまでもなく復讐物語だし、タランティーノ監督は日本のチャンバラ映画が大好き。

この『オールド・ボーイ』の原作は日本で大きな話題を呼んだコミックで、10年間なぜ監禁されたのか、そしてなぜ釈放されたのかという重いテーマを背負った復讐劇。そして今や世界的ブームとなっている韓流の中、主演はあの『シュリ』（99年）で大注目を集めた演技派、実力派のチェ・ミンシク。タランティーノ監督がこんな映画を気に入らないはずがない。

その結果、この『オールド・ボーイ』は『華氏911』とわずか2票差でバルムドールを逃したものの、見事グランプリ（審査員特別大賞）を受賞することに。パンフレットによれば、タランティーノ監督は本当はバルムドールをこの『オー

52 喋りたい、でも喋れない！ ネタバレ絶対禁止！！

ルド・ボーイ』にあげたかったらしいが……？

日本版は10年、韓国版は15年

日本の原作コミックでは監禁された年数は10年。それがこの映画では15年。監禁された理由も、この映画は原作とは全く異なるもの。

「10年ひと昔」というものの、いくら生きても100歳の人間としては、壮年期の10年間というのは貴重なもの。それが更に5年延長(?)されたのだから、その重みは一層強まるはず……。

何の理由もなく突然監禁が開始され、いつ出られるともわからないまま無為の日々を過ごしていくというのは、「つらい」とか「きびしい」とかの形容詞を通りこえるもの。

そんな物語を構想したこの原作はホントにすごいと思うが、それをこんなに見事に映画化したのはもっとすごい！

監禁の理由と釈放の理由は？

この映画のすごいところは、3人の俳優たちの演技のすばらしさを背景としたストーリー展開の面白さと迫力。つまり、だれがなぜオ・デス(チェ・ミンシク)を15年間も監禁したのか、そしてなぜそれを釈放したのか。それがこの映画の大テーマだ。デスは釈放後も常に追跡・監視されていた。そしてこれを監視していたのは、映画開始から約1時間後にはじめてスクリーンに登場するイ・ウジン(ユ・ジテ)。さて、このウジンの人物像は……？

釈放されたデスが入った日本料理の店で知り合った女性は板前のミド(カン・ヘジョン)。デスのことを「おじさん」と呼ぶこのミドとデスが惹かれたあったのはなぜか？そして、この物語の結末は一体どうなるのか？このようなテーマのもとに、この映画は観客の息を抜かせることなく、ずっとスクリーンに集中させる圧倒的迫力を見せつけてくれる。

同じ日の昼間に観た日本映画『海猫』に登場する仲村トオルたちがくり広げる「禁断の恋」物語における、薄っぺらい(?)人物像とは雲泥の差があると感じざるをえなかったが……？

🎬怪物(?) チェ・ミンシクの怪演にビックリ!

この映画の主人公デスを演ずるチェ・ミンシクは、人間の孤独と恐怖、若い女ミドへの愛、敵のウジンへの憎しみ等のあらゆる人間の感情を、極限状態までスクリーン上に示してくれる。また、15年間の監禁室の中での孤独でハードなトレーニングと、釈放後の大勢の敵を相手にした実践的アクションでも、ものすごい演技を見せている。まさに怪物(?) チェ・ミンシクの怪演というべきこの演技には、ただただビックリ!

🎬ユ・ジテのクールな演技にも脱帽!

これに対してユ・ジテ扮するウジンはあくまでクール。15年間もデスを監禁室に閉じ込めたうえ、釈放後もなおデスを観察しコントロールしていくのはなぜなのか、を容易にわからせなくさせているのがこのユ・ジテの演技。心臓のペースメーカーをいつでもリモコンで止めることができるという不気味さの裏返しとしてのこの男のクールさはホントに恐いもの。こんな「同窓生(後輩)」からずっと狙われていたと思うと、思わず背筋が寒くなりそう……?

🎬新人カン・ヘジョンの恐るべき演技

一目見た時から、ちょっと人間離れた(?) デスに惹かれる若い女ミドを演じるのは、300人のオーディションの中から選ばれたという22歳のカン・ヘジョン。最近はやりの韓流ドラマに登場するような美人女性ではなく(失礼?)、かなり個性的な顔立ちの女優だが、それだけに演技力はバツグン! 少しずつデスに惹かれていく若い女性の心理をうまく表現している他、映画の後半ではかなりハードなシーン(?) も堂々とこなしている。もちろん時々見せるヌードシーンも……。

🎬デスとウジンは同窓生(後輩)

映画の前半はこの世のものとも思われないようなシーンが次々とくり広げられて圧倒されるが、後半はちょっと不思議な謎解きゲームのような秀囲気も……。

54 喋りたい、でも喋れない! ネタバレ絶対禁止!!

この映画は、そのストーリーについて「秘密を守れ！」が絶対条件。したがってスタッフ契約書には、映画の結末を公開前に口外したら違約金を科すという条項があったとのこと。そんな衝撃的なストーリーをここでネタバレしするわけにはいかないが、1つだけその大前提となっている事実を説明すれば、それはデスとウジンは高校時代の先輩・後輩の仲だったということ。そこから解き明かされていく事実が、15年間の監禁と釈放後の追跡に見合う(?)だけの「あっと驚く物語」だというわけだ。乞うご期待！

見事なアクション

監禁室の中でデスがやったことは、テレビを観ること以外は身体を鍛えること。それも生半可なものではない。したがって、釈放されたデスには向かうところ敵なしという感じ。1人の例外、すなわちウジンにいつも付き添っている不気味なボディガードを除いては……。

そのデスが金槌1本を持って大勢の敵とわたり合い、これを次々と打ち負かしてしまう長いアクションシーンはこの映画の1つの大きな見せ場だが、デスのその動きは見事なもの。

こぶしにできているマメにもそれなりの説得力があると思ってしまう。さすがに10kg体重を落とし、ボクシングジムに通って習得しただけのことはある。

敵の男の歯を1本ずつ抜くシーン、許しを乞うため犬の真似をして、舐めたりしっぽを振るシーン、さらには自分の舌を自らはさみで切りとるシーンなど、数々のショッキングなシーンを迫真の演技で見せるチェ・ミンシクの役者魂には本当に感服するばかりだ。

15年間の歴史的重みは？

デスが監禁されたのは1988年。しかし監禁室にはテレビがあり、デスはテレビを自由に観ることができた。このためデスは釈放されるまでの15年間における天安門事件、東西ドイツの統合、金大中大統領の就任など世界の大きな動きはすべて知ることができたし、妻の死亡のニュースや韓国の若者たちのヒット曲まで、何から何まですべてテレビという情報源から学び吸収していた。

テレビに映し出される1988年から2003年までの15年間の動きは、それだけでも興味深いものだが、逆にそれだけの時間のロスの重みもすごいもの。それをどう考えればいいのだろうか？

7月5日に秘められたヒミツとは？

この映画の主演はデス、ウジン、ミドの3人だが、それ以外にも興味深い人物がたくさん登場する。第1は、デスが監禁される直前まで一緒にいた幼馴染のジュファン（チ・デハン）。

彼はデスが釈放された後の復讐劇における助手役として重要な役割を果たすが、その彼の行く末は……？

第2は、ウジンの配下にいる監禁部屋管理人のパク（オ・ダルス）や警護室長のハン（キム・ピョンオク）等。彼らはそれぞれのパートにおいて重要な役割を果たしており、その人物像もそれぞれ面白いのでよく観察してほしい。そして第3は、映画後半の「謎解き」において大きな存在となるウジンの姉のイ・スア（ユン・スギョン）。

もっとも、彼女は少女時代の姿しか登場しないし、人物像がややこしいので、その真相解明はかなり難しいが……？

これ以上登場人物の紹介をしているとネタバレになりそうでヤバイのでやめるが、この映画でウジンが監禁の謎を解き明かす期限として設定したのはなぜか7月5日。

はたして7月5日という日にはどんなヒミツが隠されているのだろうか。こんな問題意識を持ってこの映画を観れば、一層興味が湧くと思うが……。決して期待を裏切らない作品であることは私が保証しておこう。

2004(平成16)年11月21日記



Data	
監督	: スパイク・リー
脚本	: マーク・プロトセヴィッチ
原作	: 『オールド・ボーイ』（双葉社刊）作: 土屋ガロン（狩撫麻礼）画: 嶺岸信明
出演	: ジョシュ・ブローリン/エリザベス・オルセン/シャールト・コブリー/サミュエル・L・ジャクソン/マイケル・インペリオリ/リンダ・エモンド/ジェームズ・ランソン/ボム・クレメンティフ

👁️👁️ みどころ

パク・チャヌク監督、チェ・ミンシク主演の『オールド・ボーイ』（03年）もすごかったが、本作もすごい。基本的枠組みは同じだからリメイク版とも言えるが、スパイク・リー監督はあくまで独自の視点にこだわっているはずだから、それに注目！

ハンマーを振り回す独自のアクションを楽しむだけでなく、20年間の監禁からなぜ解放されたの？そんなこみ入った謎解きのスリリングな展開と、驚愕の結末をしっかりと味わいたい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■韓国vs米国、パク・チャヌクvsスパイク・リー■□■

日本は現在「クールジャパン」と銘打って、日本の優れたアニメやファッション等のコンテンツを海外に「輸出」しようとしているが、土屋ガロン（狩撫麻礼）作、嶺岸信明画のコミック『オールド・ボーイ』は既に韓国のパク・チャヌク監督が目をつけ、2003年に映画『オールド・ボーイ』として完成させ、2004年の第57回カンヌ国際映画祭で審査員特別グランプリを受賞する、すごい映画になった。私はそれについて、「日本産のコミックを原形としているが、この映画は全く新しい独自のストーリーを創り上げているうえ、俳優陣の演技の迫力は満点。韓国パワー全開の快作で、これではとても普通の日本映画は太刀打ちできないと脱帽！」と書いた（『シネマールーム6』52頁参照）。

韓国のパク・チャヌク監督が、『JSA』（00年）（『シネマールーム1』62頁参照）、『復讐者に憐れみを』（02年）、『親切なクムジャさん』（05年）（『シネマールーム9』222頁参照）、『イノセント・ガーデン』（12年）（『シネマールーム30』131頁参照）等の問題作を次々と作り出した監督なら、ハリウッドのスパイク・リー監督も、古くは『マルコ

ム X』(92年)、新しくは『25時』(02年)、『セレブの種』(04年)、『シネマルーム12』101頁参照)、『インサイド・マン』(06年)、『シネマルーム11』65頁参照)、『セントアンナの奇跡』(08年)、『シネマルーム23』88頁参照)等すばらしい作品を監督している。私は原作のコミックは読んでいないが、パク・チャヌク監督の映画を観て衝撃を受けたのはスパイク・リー監督も同じだったらしく、韓国版を見て彼はそのハリウッド版の監督(決してリメイクではない)を決意したわけだ。

韓国版で主演したチェ・ミンシクはピッタリのハマり役だったが、スパイク・リー監督が本作で主役のジョー・ドーセット役に起用したのはジョシュ・ブローリン。私は彼を『ウォール・ストリート』(10年)、『シネマルーム26』160頁参照)、『トゥルー・グリット』(10年)、『シネマルーム26』39頁参照)等で観ているが、それほど強い印象はなかった。しかし、5月5日に観たケイト・ウィンスレットと共演した『とらわれて夏』(13年)では強烈な印象を残したジョシュは、本作でどれほどのインパクトを見せてくれるの?基本的ストーリーがわかっていることはプラスにもマイナスにも働くが、さてスパイク・リー監督はそんな原作と、03年の韓国映画の名作をもとに、いかなるアレンジを…?

■□■一人芝居は大変だが、さすがの展開に!■□■

ハリウッドの俳優は背が高く胸板も厚いから高級スーツ姿がよく似合う。したがって、広告代理店の重役をしている主人公ジョーがちゃんとしたスーツ・ネクタイ姿で登場すると、すごくカッコいい。ところが、いかんせんジョーは傲慢な性格の上、アル中気味らしい。スクリーン上でみる、成約寸前までこぎ着けた商談をブチ壊しにしたのはあくまで自分のいやらしさのせいだから、反省すべきは自分自身なのに、ジョーがその後酒に溺れて町を徘徊する姿はあさましくかつおぞましい。これでは、妻ドナとの生活が破綻したのは当然だし、3歳の娘ミナと離れ離れにされたのも仕方ない。

世の中にはこの手のいわゆる「負け組」予備軍の男はたくさんいるが、泥酔して雨の中、中華街を彷徨い歩くジョーの側に立った、黄色い傘を持った女(ポム・クレメンティフ)は一体ナニ者?女の甘い誘惑につい惹かれていったのは男として仕方ないが、ジョーが目を見ますと、何とそこは監禁部屋。みすばらしい部屋の壁には十字架が架けられ、聖書が置かれていたが、頑強な鉄製のドアにはノブがなく、いくら人を呼んでも反応がなかった。

『とらわれて夏』ではジョシュはケイト・ウィンスレットとの「心理戦」の芝居がほとんどだったし、演技力抜群の女優ケイト・ウィンスレットとの相乗効果が期待できたが、本作導入部のほとんどはジョシュの一人芝居だから大変!高級スーツを着たまま酔いつぶれて徘徊する姿はみっともないが、監禁部屋に閉じ込められてから見せるジョシュの一人芝居は、韓国版でチェ・ミンシクが見せたのと同じように迫力十分だから、それに注目!

■□■10年vs15年vs20年、その間のニュースは?■□■

韓国版を観ていなくても、本作を観れば、韓国のみならずアメリカにも「監禁ビジネス」なるものが存在し、チェイニー(サミュエル・L・ジャクソン)がそれを仕切っているこ

とがわかる。しかし、その依頼主とは一体どんな人種？それが中盤以降の本作の焦点になる。

食事が餃子だけというのはハリウッド版も韓国版も同じだが、なぜハリウッド版のそれはハンバーガーだけではないの？また、テレビから流れてくるニュースが外部との唯一の接点というのも韓国版と同じだが、そこで流れてくるニュースは？原作は監禁期間が10年、韓国版は15年、そして本作は20年と差異がある。したがって、1988年から15年間監禁された韓国版では、テレビから流れてくるニュースは、①天安門事件、②東西ドイツの統合、③金大中大統領の就任等々だった。それに対して、1993年から2013年まで20年間監禁された本作の監禁室のテレビから流れるニュースは、①9.11同時多発テロ、②ブッシュ大統領によるイラク戦争、③ハリケーン・カトリーナの襲来、④初の黒人大統領バラク・オバマの誕生等々だ。

ちなみに、日本では1993年8月の細川護熙連立政権の誕生によって、日本の新しい夜明けの誕生かと思われたが、残念ながら2001年4月から5年半続いた小泉純一郎改革の時代を除いては、「失われた20年」が続いた。また、2009年8月の政権交代による民主党政権の誕生も、何の転換点にもなりえなかったことは周知のとおりだ。

■ジョーの脱出は意外な形で■

テレビ報道の中で、自分が妻ドナ殺しの犯人に仕立て上げられたことを知らされたジョーは、一度は絶望のどん底に沈んだ。しかし、5年後のテレビ番組『犯罪ミステリー』では、ある夫婦に養子として引き取られた一人娘ミナが小学生になり、チェロを弾く姿が紹介されたから、そこから一念発起。以降一切の酒を断ち、テレビ番組を観ながら身体を鍛え、毎日少しずつバスルームのレンガ壁を剥がしていったから、偉いものだ。

しかして、20年後の今日は監禁部屋からの脱出を決行する日。まずは予行演習的にバスルームのレンガを取り除き、身体を移動させてみると何とかうまくいきそう。そう思い、「いざ本番！」となったが、その瞬間、なぜか部屋の中には煙が充満し、情けないことになりがちジョーは昏倒してしまうことに。これでは、せっかくの脱出計画も水の泡に……。

ロビンソン・クルーソーは漂着した無人島で28年間も暮らしたが、そこでは自由に動き回ることができたから、20年間も同じ部屋に監禁されたジョーよりはまだまだし。そう言えるかどうかはわからないが、ヒゲぼうぼうの姿になっているのは、ロビンソン・クルーソーもジョーも同じだ。したがって、やっと決行した脱出計画が失敗すれば、再びジョーは監禁生活に逆戻り。ジョーのみならず観客の誰もがそう思ったが、意外にもスパイク・リー監督がスクリーン上に示す次のシーンは、野っ原に置かれた大きなトランクから抜け出すジョーの姿。しかも、ここでジョーのヒゲはキレイに剃られていたうえ、それなりのスーツを着て目にはサングラスが。これは一体なぜ？誰がジョーに対して、こんな手の込んだ細工を？

何はともあれ、狭い監禁部屋から広い大地に解放されたジョーは大喜びだが、何とその

目の前にはあの時の黄色い傘の女の姿が見えたから、ジョーがこれを追ったのは当然。さあ、その後の展開は・・・？

■□声だけの犯人のヒントは？大乱闘の見せ場は？■□

女を見失い、路上でトラブルを引き起こしたジョーを助けたのは、ソーシャル・ワーカーをしている若い女性マリー・セバスチャン（エリザベス・オルセン）。マリーはなぜジョーのような奇妙な男に興味を示したの？それが、本作のラストにみる驚愕の結末に繋がっていくからよくよく注目を！また、ジョーが身を寄せたのは、20年前に泥酔状態のジョーに対して「もう閉店だ」と言って酒を飲ませてくれなかった旧友のチャッキー（マイケル・インペリオリ）のバー。だが、ジョーをかくまったことによってチャッキーにはその後どんな人生が・・・？

それはともかく、そんなジョーのポケットに入っていたスマートフォンには、「外の1日目はどうだ？いずれ私から、ある提案をする」という電話が入ってきたから、ジョーは「俺を監禁した犯人はきっとこいつだ」と確信。しかし、その声に全く聞き覚えのないジョーは、監禁中に毎日食べていた餃子の店の名がドラコンだったことを頼りに、マリーの協力を得て片っ端から調べていくと、デリバリー先の殺風景なビルを突き止めたからしめしめ……。そこから監禁ビジネスの元締めをしている男チェイニー（サミュエル・L・ジャクソン）を突き止めたジョーは、チェイニーに対してサディスティックな拷問を加えて依頼主の名前を聞き出そうとするが、それが意外に難航。そして、チェイニーを助けに来た手下どもを相手にハンマーをふるう大アクションになる。ある意味これは韓国版の二番煎じだが、どうしても強調しなければならぬ本作の見せ場にもなっている。私はやはり、チェ・ミンシクの乱闘ぶりの方が好きだが、さてあなたは・・・？

■□犯人は誰だ？なぜジョーを監禁し、なぜ解放を？■□

韓国版では犯人役をあくまでクールな演技に徹したユ・ジテが演じたが、本作で犯人エイドリアンを演ずるシャールト・コプリの演技もあくまでクール。韓国版では「そのストーリーについて『秘密を守れ！』が絶対条件」で、「スタッフ契約書には、映画の結末を公開前に口外したら違約金を科すという条項があった」らしい。したがって、その評論を書くについてはかなり神経を使ったが、そこで「デスとウジンは高校時代の先輩・後輩の仲だった」という「大前提となっている事実の1つ」だけは説明した。しかして本作においても、大胆にもチャッキーのバーに顔を出した犯人エイドリアンとジョーとの関係は基本的にその「枠組み」を踏襲している。

誰でも感受性豊かな中学・高校生時代には、淡い初恋に心をときめかした経験がある一方、知らない間に他人の心を傷つけた経験があるはずだ。そんな場合、加害者となった者はその経験を忘れても、被害者となった者はずっとその恨みを持ち続けることになるものだ。本作はいわば、そんなハイスクール時代の「ある体験」が20年間にわたる監禁の動機となっていることが後半の展開から見えてくる。ところが、そこでエイドリアンからジ

ジョーに対して提起される質問は、「なぜ監禁されたのか？」と共に「なぜ解放されたのか？」というものだ。つまり、脱出のためにジョーが払ったあれほどの努力は実は何の意味もないもので、監禁した側の意志によってジョーは解放されたにすぎなかったわけだ。本作のラストに向けては、「なぜ監禁されたのか？」と共に、なぜ「解放されたのか？」という質問に対する答えを導き出すためのジョーの苦しい闘いが続くことになるから、私たちがジョーと共にその過程をしっかりと確認したい。

■□■恋模様の展開は？あっと驚く結末は？■□■

本作の基本的な対立軸は、後に同級生だったことが明らかにされる、監禁された男ジョーと監禁した男エイドリアンとの2人だが、登場する若い女性も2人だ。1人は登場シーンは少ないものの、暗示的な存在となる「黄色い傘の女」。もう一人は、途中からなぜかジョーに興味を示し、ジョーに協力する女マリーだ。黄色い傘の女が実はどんな女だったのかはあなた自身の目でしっかりと確認してもらいたいが、マリーを演じたエリザベス・オルセンは『マーサ、あるいはマーシー・メイ』（11年）で、「加速する狂気を熱演」した新星エリザベス・オルセン（『シネマルーム30』218頁参照）。同作で2011年サンダンス映画祭の監督賞を受賞した29歳の新人監督ショーン・ダーキンが見出したそんな「新しいミュージズ」は、本作でも強烈な存在感を見せている。

とは言っても、本作の主演はあくまでジョーだから、マリーが果たす役割はあくまで助手的なものにすぎないが、なぜ彼女はジョーに対してそこまでの協力を？それは「ソーシャル・ワーカー」としての義務感だけ？それとも・・・？韓国版では、解放されたデスに協力するうち、少しずつデスに惹かれていく女性ミドを演じたカン・ヘジョンは、演技力はもちろん、かなりハードなシーンも堂々とこなしていたし、時々見せるヌードシーンも良かったが、さてマリーは？

ジョーとマリーの2人が激しく結ばれるのは、あるモーテルの中。ジョーとエイドリアンが共に高校時代を過ごした母校の元校長エドウィナ・バーク（リンダ・エモンド）から事情を聴き、夜中に学校に忍び込んで発見した卒業アルバムの中から、ジョーがある忌まわしい過去を思い出した直後だ。心身ともに傷ついた2人がこんな形で惹かれあい、結ばれたのは必然かもしれないが、もしこの恋模様の展開がエイドリアンの想定範囲内だとしたら・・・？

しかして、本作ラストにはクエンティン・タランティノー監督の『キル・ビル〜KILL BILL〜Vol. 1』（『シネマルーム3』131頁参照）、『キル・ビル〜KILL BILL〜Vol. 2』（『シネマルーム4』164頁参照）で見たラストや、高倉健のヤクザ映画のラストのように、マリーの制止を振り切ってすべての落とし前をつけるべくエイドリアンのペントハウスに向かうジョーの姿が登場する。そこに待ち受けるのはエイドリアンと黄色い傘の女だけだが、さてそこで展開される「死闘」と、とことん凝縮された心理ゲームとは？そして、ある意味あっけないとも思えるエイドリアンの最後と、ジョーが永久に抱き続けなければならない苦悩とは？しかして、エイドリアンの復讐は成功したの？それとも・・・？

2014（平成26）年5月23日記